

千葉療護センターにおけるMRSA検出状況

山崎 純子¹、畠山 文子²、岡 信男³

¹自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部、²自動車事故対策機構 千葉療護センター 検査科、

³自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

MRSA 感染症は病院感染症として重要であり、近年では病院内で検出される黄色ブドウ球菌の60%がMRSAであるとの報告もある。慢性期の重傷脳損傷後遺症患者が入院している千葉療護センターでは、1992年からすべての入院患者に対し入院時に喀痰MRSA培養検査を行ってきた。近年その検出率は増加傾向にあり2011年に入院した患者28例中12例に喀痰からMRSAが検出されている。今回、入院時MRSA培養検査を開始した1992年以降の入院患者で2012年3月4日現在入院中のすべての患者63例に対して、気管切開のある例は喀痰を、ない例は鼻腔内スワブを検体としてMRSA培養検査を行った。その結果63例中11例にMRSAが検出された。このうち6例は入院時の検査でMRSA陽性であり、5例は入院時にはMRSA陰性の症例であった。この63例において入院時MRSA陽性であった患者は17例であり、このうち11例からは今回の検査でMRSAは検出されなかった。近年、医療施設におけるMRSA検出率は高く、特に当センターではワンフロアの病棟構造であるため、保菌者の個室管理は困難な状況にあり、標準予防策の徹底とcompromised hostへの対策が重要となる。1992年から2011年末までに入院した症例でMRSA感染症と考えられる例は入院時に喀痰からMRSAが検出された患者で、硬膜外膿瘍がみられ、髄液からMRSAが検出された1例であるが、転院時から硬膜外貯留液があり、当センターでの感染か前医療機関での感染か不明である。